〔 自由思想の継承・時代への警鐘 〕

湛山思想の真価

姜　　克　實
（岡山大学大学院教授）

１．いくつかの断面像

姜克實と申します。ジャン・クーシーとは、中国語の発音です。文学研究科の出身で、いま岡山大学で日本近代史を教えています。今日は、本学が生んだ思想家、石橋湛山の思想の価値についてお話します。

今年は日中国交正常化35周年の記念の年に当たりますが、石橋さんはその翌年になくなられたので、ご逝去されてまもなく、35年になります。この人物に関して、同時代の人なら、幾ばくの記憶があり、また残された功績や豊富な学識により、学界、財界、政治界、ジャーナリズムにもその存在が知られています。しかし、若い世代には、今までそれほど影響がなかったようです。

最近、少しずつではありますが、湛山の影響力が一般国民にも及んできています。教科書、受験のキーワードに東洋経済新報、石橋湛山などが登場し、今年の七月、NHKの人気番組「その時歴史が動いた」にも取りあげられ、広く一般視聴者の眼にも触れるようになっています。

しかし、石橋湛山は一体どんな人物なのか。その思想・歴史的価値について、まだ、ほとんど分かっていないようです。NHKの番組も例外なく、大量のビジュアルの資料を駆使したにも拘わらず、結局「その時、こんな偉い人物がいたぞ」、という上辺の印象しか、国民に伝えられませんでした。言い換えれば、今ようやく浮かんできた石橋湛山のイメージは、全体の思想像ではなく、戦前で帝国主義を批判したジャーナリストや、戦後、日中国交の回復に尽力した政治家など、その功績を並べた断片的な人物像にすぎません。

それもそのはず。じつは湛山の思想像を全体的に、有機的に把握するのは非常に難しいことでもあります。生涯88年、明治、大正、昭和の三つの激動の時代を生き抜いた彼には、ジャーナリスト・評論家の顔、経済スペシャリストの知識、総理大臣にまで登り詰めた政治家の経験のほか、あまり知られていない哲学思想家の一面もあり、どちらも半端の知識・修養ではありません。それらを立体的に把握することは、専門の研究者にとっても決して簡単なことではありません。

結局、今まで造られた石橋湛山の像は、それぞれの専門分野にある研究者たちが、それぞれの関心、アプローチによって提供した、いくつかの断面像に過ぎません。

すこし例を挙げて説明すると、

・一つの断面は、政界のサイドからみた石橋湛山像です。政治が混迷・腐敗したとき、良心ある政治家たちはよく湛山を取りあげ、政治の鑑にします。この時湛山の価値は、いうまでもなく、政治のモラルにあります。

いわば、石橋は、今日よく見られる、選挙基盤を「世襲の家業」にするような「政治屋」ではなく、非

金権政治、非世襲政治の清廉な政治家の手本である。

あるいは、権力闘争に明け暮れる今の政治家と違い、自らの政治理念に忠実する、信念ある政治家として、湛山を讃えます。湛山は党派の利益より、自らの理想、政策を優先にし、自民党に属しながらつねに超党派の姿勢で、党外の政策協力を求めたことで、よく知られます。とくに晩年の護憲、軍備全廃の姿勢は、保守よりむしろ革新勢力の立場に近い。

あるいは、読書の政治家、スペシャリストの首相として石橋湛山の知識を評価します。湛山は、原書で経済学を独学し、60年間の言論生活を通じて、2,000にも及ぶ論文、論評を書きあげ、その一部を記録した『石橋湛山全集』だけで、15巻に上ります。こうした湛山の学問的素質が評価されています。

このような、政治のモラル、学識、政策中心主義、超党派の姿勢などは、すなわち、政治家、政治評論家達が見た石橋湛山の価値であります。

・二つ目の断面は、ジャーナリズムから見た湛山像です。

石橋湛山は社会に入ってから政治家になるまで、約40年の間、主にジャーナリストとして活躍していました。明治末、大正初期の明治神宮造営反対論、普通選挙・代議政治論、また、一次大戦期の小日本主義、植民地放棄論、あるいは、戦時下の軍部への抵抗、戦後の靖国神社廃止論など、どちらにも反権力の、自由主義の精神が貫かれており、その時代の最高の到達点に位置づけられます。この反骨精神、自由主義、平和主義の立場は、ジャーナリズムから高く評価されており、いま、我が早稲田大学が打ち出そうとした湛山像も、おおよそこの認識であります。

また、やや主旨が違うけれども、石橋湛山の帝国主義批判論、小国主義の主張、英米協調の立場など、その異彩を放つ国際認識が、国際関係・政治外交の学問分野でも高く評価され、そのため、石橋を「外交評論家」と見ているものも多い。今日一般化した石橋のイメージも、おおよそこのようにジャーナリズムと外交評論の面を中心に構成されていると言えます。

・三つ目の断面は、経済界、とくに経済史学界からきた石橋評価です。

石橋湛山は実践的経済人であり、評論家としての活動も主として経済評論でした。老舗『東洋経済新報』の主幹、社長を長く務めており、その代表的主張の「小日本主義」も、正しく言うと、外交評論ではなく経済思想でした。経済的発想から産まれ、解決しようとした問題も、小国日本の経済発展の方向でした。

この経済思想の面こそ、湛山思想の真髄と言わなければならないが、複雑な経済理論、用語が絡まってきて、一般の人がなかなか理解できません。ですから、経済人としての石橋湛山評価は極めて重要ですが、なかなか広まらないのが現状であります。

以上のような、三つないし四つのサイドから見た石橋湛山像は何れも真実ですが、分断された「断面像」に過ぎません。一つの断面をもって、石橋を評価しようとしたら、場合によって間違った解釈を来す結果になります。

例えば、帝国主義に反対、普通選挙を主張、天皇制を批判などの言論から、大正期の石橋を「急進的自由主義」者とみる見解が産まれます。これは、先述したジャーナリズムのサイドからきた、代表的見解でもあります。しかし、「急進的」という狭い政治の視野にとらわれると、戦時中、沈黙することなく発言しつづけ、戦後、さらに保守政党の政治家になった石橋湛山の行動について、解釈することが出来ません。挙げ句に、いわゆる大正期の急進的自由主義、戦時中の変節者、戦後の保守化という説が生まれてきます。このように、方法論的行き詰まりによって、おのずから石橋の生涯に、戦前、戦時中、戦後の三つの断層を作ってしまいます。

あるいは、石橋湛山を国際関係論者、外交評論家とみる場合、その小国主義認識の経済論的背景、また

思想、哲学的根拠を解明できません。結局、到達点のみを評価する、いわば、うわべの言論の羅列になります。指摘すべきは、湛山思想の価値は決して帝国主義批判だけにではない。帝国主義を批判した外交評論家はほかにもいます。湛山の特徴はむしろ、経済の面で、帝国主義を捨てた後の日本はどのように生きるか、という理論にあります。

要するに、過去形の石橋湛山、あるいは飾り物の石橋湛山ではなく、いまの国家、社会、現在人生に役立つ湛山思想の歴史的価値を把握しようとしたら、ジャーナリズム、政治家、また経済評論家としての石橋の各断面像を総合的に、または有機的に把握する作業が必要だと思います。

この作業は一見難しそうですが、実はそれほどではありません。すなわち、湛山の思想哲学、自由主義と個人主義の特徴を軸に、各時期、また各分野における石橋湛山の言論・行動を総合的に把握することです。小日本主義の外交評論と、人間中心の生産力発展論、ケインズ主義的積極財政論とどんな関係なのか、大正期、「急進的」に見える主張と戦後の「保守政治家」とどんな内在的、思想的つながりがあるかを、湛山の自由主義の特徴を通じて捉えることであります。

２．石橋湛山の思想哲学と自由主義の特徴

湛山の自由主義思想には、二つの特徴があります。一は、自省（自己反省）、自律（自己規制）の主張であり、石橋湛山の言葉でいうと「欲望統制」の哲学であります。二は、社会生活の実践の効果を重視する価値観であります（プラグマティズム）。言い換えれば、人間の社会生活を円滑に進めるため、「自我」（「社会」という基本単位における個人）、また「国家」（「世界」という基本単位における一国）の欲望を、自律的に、また他律的に制御する主張です。石橋湛山は自由主義者、個人主義者であることは間違いありません。一方、彼が社会実践に入ったのは、自由放任の弊害がもろに現れた明治末年であり、この時彼が選んだのは、自由放任の古典的自由主義、個人主義ではなく、その弊害を是正しようとする新しい自由主義でした。湛山は自らの自由主義と個人主義を表現する時、かならず「新」自由主義、「正しき」個人主義の修飾を加えますが、この修飾には、自己規制の意味が含まれています。

ここから、石橋は決して、言われるような「急進的自由主義」者ではないことが分かります。むしろ、漸進的、自制的、実践的自由主義、個人主義と言うべきです。この自由主義、個人主義に対する理解・解釈から、彼の特色となる、個人と社会全体の利害調和、国家と国際社会全体との利害調和の主張が産まれてきたわけです。

もちろん、個人主義者である湛山は「個人本位」の立場を否定しません。しかし、彼が言う個人本位の意味は、行動の出発点（動機）と到達点（目的）のみで、つまりおのれの欲望から出発し、おのれの満足を目的とするが、その実現の過程において、社会との調和を主張するのが特徴です。

宗教的、献身的「利他」主義、奉仕精神ではなく、自己実現のために「自己規制」を唱えるバランス感覚のいい個人主義であります。最近、「共生」ということばが流行っており、自分の民族、国家だけではなく、他の民族・国家、他の文化、自然環境と一緒に調和して生きる意味で使用されているが、石橋湛山が主張していた欲望統制の概念に極めて近い。共生のことばが流行しはじめたのは、つい十数年前のことですが、もし、世の中が湛山のように、100年前の帝国主義の世の中からこの言葉の重みを知っていたとしたら、どれほどの戦争と破壊の犠牲が免れるか、想像する限りではありません。

この社会生活の実践効果を重視する、自制的自由主義、個人主義の立場にたって、湛山は自分の社会実践を出発させていきます。

明治の末年で、彼は文藝と社会評論の面において、社会の生活機能の健全化を目指し、欲望の統制、個

人と社会の調和を主張していました。やがて大正時代に入り、彼は政治評論の分野にも進出し、1915年頃、「新自由主義」という政治、経済綱領を掲げ出し、自由放任の是正、社会政策の施行、公平な分配などを唱えていました。国家による政策的規制によって、資本主義の弊害を是正しようとするのは、発想の主眼であります。

一次大戦の頃から、湛山は帝国主義批判論、植民地放棄論などを盛んに主張し、大戦後の太平洋軍縮会議に向けて、「大日本主義の幻想」の放棄、植民地などを「一切棄つるの覚悟」を、政府に要請しました。これらの「小日本主義」の発言も、同じように、国際社会の運営機能を健全化するため、各国家の領土的欲望を統制しなければならないという発想から来たものでした。

後、経済評論家になった湛山は、資源、領土に恵まれない小国日本の活路を見出すべく、人間中心の産業革命論を主張し、人間の潜在的能力の発揮による経済の発展の方向を示しました。1920年代以降、彼は新農業政策論、ケインズ主義的貨幣政策、新平価金解禁論、積極財政論などをつぎつぎ主張しだしましたが、これらの一見複雑そうにみえる経済論策も、じつは主旨が極めて明瞭です。すなわち、外に向く帝国主義、大国主義の欲望を制御して内面に向かわせ、いかに人間の頭脳、労働を最大限に利用するかにありました。湛山の経済学は要するに、人間の経済学であり、人間の努力、労働、国内の市場を重視する経済学でした。この人間の労働、智恵を唯一の資源とする小国主義的経済思想は、戦前の植民地放棄論、帝国主義批判論の中に活かされただけではなく、戦時中の世界経済論、また戦後の復興、再建の諸政策にも貫かれています。

晩年の湛山の「日中米ソ平和同盟」の平和構想にも同じように、国際社会の生活において、特定の国、特定のイデオロギーを固持するのではなく、価値観の異なる他の社会制度、他国との調和を図ろうとするもので、謙虚と反省的姿勢が貫かれていました。冷戦の解消を実現するため、彼は「人間の幸福」や「平和」など人類共通の価値観を携えて日中、日ソ間を行脚し、いつも、「幸福・平和」を求める同じ人間同士だから話せば分かるという、相手の立場、意見を尊重する謙虚な姿勢を保っていました。

以上のように我々は、石橋湛山の欲望統制の哲学と、社会生活の効果を重視する価値観という二つの思想特徴を通じて、戦前、戦時中、戦後の湛山、また言論人、経済人、政治家として異なったように見える湛山の断面像をトータルに、立体的に捉えることが出来るのではないかと思います。

３．石橋湛山の思想源流

では、以上のような石橋湛山の思想哲学がどのように形成したのか。

石橋湛山の思想形成に関して、幼少年期に受けた日蓮の影響と、山梨尋常中学校で間接に受け入れたクラーク博士の感化および、早稲田大学在学時代の田中王堂の哲学の影響という、三つの源流があるとされますが、日蓮とクラーク博士の感化は、主として湛山の人格形成に影響を及ぼし、志、忍耐力、反骨精神、チャレンジ精神など、湛山思想の下地を形成しています。

これに対して、湛山思想の方法論的特徴をなした、社会の見方、ものの考え方に影響を及ぼしたのは、主として田中王堂の哲学です。前述した湛山の言論活動に貫いた自省、自律の哲学、社会生活を重視するプラグマティズム的立場も、この田中王堂哲学からの賜物であります。

石橋湛山は、1907年早稲田大学哲学科を首席で卒業し、さらに特待研究生として一年間在学していました。恩師田中王堂との関係は、在学の四年間だけではなく、王堂が死去した1932年まで続き、さらに戦後になっても、王堂の著作集の刊行に尽力していました。湛山は後年、王堂先生の学恩を回顧して言う。

「私は、先生によって、初めて人生を見る目を開かれた。…もし、今日の私の物の考え方に、なにがしか

の特徴があるとすれば、主としてそれは王堂哲学の賜物であるといって過言ではない」(『湛山回想』岩波文庫、七八頁)。

この田中王堂はいったいどんな人物か、見てみましょう。彼は明治、大正期の哲学者、文明批評家としても名高い。また日本プラグマティズムの第一人者とも言われ、1889年からアメリカに８年間留学し、シカゴ大学で哲学部学部長のジョン・デューイに師事し、プラグマティズムの影響を受けて帰国しました。当時、「プラグマティズム」という学問の概念さえ産まれていない草創の時期で、デューイを始め、のちアメリカプラグマティズムを担ったリーダーたちは、ここで「シカゴ心理学派」を固め、哲学者、心理学者のウィリアム・ジェームズを師として仰いでいました。王堂はデューイとともに、ウィリアム・ジェームズの機能心理学から養分を受け、自らの哲学 —— 活動的一元論 —— を創出しています。

田中王堂の哲学には、人間の社会生活を重視する価値標準（プラグマティズム）と、凡ての事物を一元的、作用的に捉える相対主義的方法論という二つの面があり、社会生活機能の健全化の考慮から、「欲望」と「理想」、「個人」と「社会」の二側面の円滑な協調を主張するのが、最大の特徴であります。

人間の社会生活を円滑に進めるため、個人の欲望を統制しなければならないと、王堂は常に言いますが、この教えはすでに宗教的自省心、忍耐力の思想素地を持つ、若き石橋湛山に大きな感銘を及ぼし、田中王堂の、人間の社会生活を重視するプラグマティズムの価値基準と、事物を一元的、作用的に捉える相対主義的方法論も、そのまま石橋湛山の思想、方法論になり変わった訳です。

湛山の特徴は、王堂哲学に対する学問領域での貢献と発展ではなく、その社会実践にあります。1908年から社会に投身した湛山は、のち長い人生において、王堂の哲学を社会評論、政治綱領、国際認識、経済論に活かして、自らの独特の主張を打ち出すのに成功し、先に触れた欲望の統制と、社会生活の効果を重視する湛山流の新自由主義も、帝国主義批判論も、人間中心の小国主義の経済思想も、こうした王堂哲学の実践を通じて産まれた成果というべきです。

４．湛山思想の価値

湛山の価値はいったい何処にあるか。私のところに、湛山思想の未発の可能性を惜しむ声がよく寄せられます。もし、石橋湛山と東洋経済新報の小国主義が日本の世論をリードできれば…、もし、戦後の石橋湛山内閣を長く続けることが出来れば…、歴史が変わっただろう、と。

これに対して、私は否定的であります。戦前の帝国主義、軍国主義の世中において、小国主義が埋没されるのは必然の運命であり、戦後の石橋内閣がもし長く続いたとしても、劇的な政治変化は望めません。歴史的環境が未熟だったためです。

湛山思想の真価は、現実性、政策性にではなく、この時代を超えた先見性と、また、国家の在り方、また人間の生き方を示した思想性にあります。「反骨」や「進取」など、一代で終わる人格的要素だけではなく、「謙虚に生きる、禁欲的に生きる、周りと調和して生きる」という、人間または国家の生き方を示した思想方法的要素こそ、石橋湛山の思想の真価ではないでしょうか。だから、「政治家」、「ジャーナリスト」の呼称より、私は、石橋湛山のことを「思想家」と称して、一番ふさわしいのではないかと思います。話はこれで終わります。ご静聴、有り難うございました。

湛山思想の真価

石橋湛山（1884-1973）は明治、大正、昭和の三つの時代を生き抜き、言論界、経済界、政界で多様な活動をしてきた。その言論思想も哲学、文芸理論、社会批評、政治、外交理論、経済思想など多岐にわたり、奥行きも深い。一方、これまで湛山像には、政治家としての湛山、言論人としての湛山、また経済人としての湛山など、いろいろあるが、いずれも、その言論行動の一面をとらえた、断面像にすぎない。湛山の文芸批評、代議政治論、帝国主義批判、小日本主義、ケインズ主義的経済政策には相互に繋がりがあるか、戦前の「急進的」に見える言論と戦後の「保守党」政治家の行動に接点はあるのかと、未解決の問題が多い。その全体像を解明するため、彼の思想哲学、自由主義と個人主義を軸に、各時期、また各分野における言論行動を総合的に有機的に把握する必要があろう。

湛山は早稲田大学の哲学科の出身で、1907年首席で卒業し、さらに特待研究生として一年間哲学を研鑽していた。この間、文学部講師・哲学者田中王堂（1867-1932）の深い影響を受け、特殊な個人主義と自由主義の立場を固め、社会実践のための価値基準と方法論を形成する。その特徴は、一、自省（自己反省）、自律（自己規制）の主張と、二、社会生活の機能を重視するプラグマティズムの価値観にある。湛山の、文明批評に現れる「欲望統制」の主張、自由放任主義の是正を訴える「新自由主義」の立場、国際秩序を重視する小国主義思想、人間中心、労働力重視の国内生産力発展論、および戦時下の世界経済論、「正しき個人主義」の堅持、戦後の東西冷戦解消のための努力など、みな、こうした自省、自律の思想と、社会生活の機能を重視するプラグマティズムにその接点を見つけられる。

湛山の思想形成には日蓮、W.クラーク博士の感化による人格形成の部分と、田中王堂の学問影響による哲学、方法論の部分があるが、後者は、その思想の特徴といえる。

田中王堂は日本プラグマティズムの第一人者で、1889年からアメリカに８年間留学し、シカゴ大学でジョン・デューイに師事、また、W・ジェームズからの影響も受ける。のち、ジェームズとデューイらを中心にプラグマティズムの学説を形成するが、王堂も、草創期この学説の成立に貢献した一人といえる。彼の代表的主張は、「活動的一元論」というが、事物を一元的、作用的に捉える方法と、社会生活の機能を重視し、「欲望」と「理想」、「個人」と「社会」の円滑な協調を主張する二つの特徴が見られる。湛山はこの王堂哲学の精華をそのまま吸収して後の社会実践、評論活動に生かしたのである。

湛山の自省、自律の哲学と社会生活重視の価値観が、戦前には帝国主義否定の小国主義、戦後には冷戦解消ための「日中米ソ平和同盟」論という二つの、超時代の構想を生ませただけではなく、今日の「共生」思想の原型もその中に垣間見られる。

歴史的環境の未熟で、湛山の思想はその時代において無視され、埋没されていたが、近代史全体のスパンから眺めると、極めて早い段階から、正しい国家の在り方、政治のあり方、また人間の生き方を示した、思想史的価値が大きい。現実主義の政治家、言論人、経済人としてより、私は、石橋湛山を時代を見透した「思想家」として評価したい。

言論出発時の個人主義・自由主義認識（明治末年）

「十八世紀以来の西洋の天賦人権論の影響で、人には本来そんな権利が自らそなわっているように錯覚しているが、それはまちがいで、いわゆる人権が尊重されるのは、これを尊重することが社会生活上必要であり、価値があるからに外ならない。その必要がなく、価値がないところには、いかなるものも尊重はされない。」（『湛山回想』、一二〇頁）

「団体とは個人の集合である。個人無しには団体は出来ない。従ってある団体を善くしようとせば、是非共其の団体を形ち作っておる各個人を善くしなければならぬ」。「又之れに反して個人は団体無しには生活することが出来ない」、「されば個人の幸福発展ということを主眼とする個人主義者も、亦矢張其の当然の結果として団体主義を無視するわけには行かぬ。否、無視する処か是非共之れを取らねばならぬ」という（「軍隊の教育法」、一九一三年、『全集』①、五三六～七頁）。

「充実したる生活とは、諸種の欲望の統制せられて紊れざる生活をいう」。「個人が生存を維持せんが為めには、或個々の欲望はこれを棄てざるべからず。社会が生存を維持せんと欲せば、また実に或個人はこれを棄てて顧みざるの止むべからざるものあり」（『全集』①、一六一頁）。

「今日の婦人問題は最早『権利』の主張ではなくして、如何にして、我等（婦人）はこの生存競争の渦中に於て生活すべきかという問題になって来た」（「婦人位置の移動」『全集』①、二八五頁）。

新自由主義の政治思想（大正初期）

「国家は個人の欲望満足の機関として起ったものである。しかし個人の欲望は、その起り来たるだけを悉く発動せしむるということは出来ない。若し悉くを発動せしめたならば、却って全体としての欲望の満足を妨げる。故に何うしても或る統一を要し、或る整理を要する」。「日々夜々国家が個人の欲望の発現を制限しておると同時に、個人の欲望も絶えず国家を変化せしめつつあるのである」（「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」『全集』①、一二八頁）。

「国民をして飽まで議会を尊重せしめ、かの直接行動の如き好ましからぬ風を我国に移入せざらんと欲すれば、先ず普通選挙を施行するが第一の策である」、「吾輩は敢て普通選挙を国民の権利として主張せず、国家の安寧幸福の為に求むる」（「臨時議会と普選案」『全集』③、六一～三頁）。

「人間の生活は、徹頭徹尾、社会と自己との複合物である。否もっと厳格に云えば、社会でも、自己でもない、或全的単一の生活である。社会とか自己とか云うは、人間が其全的単一の生活を、便宜上二個の側面に区分して考えた、思惟の産物に外ならない」「動揺せる時代の哲学」（『全集』④、五八四頁）。

「吾輩は所謂人道なる言葉は嫌いである、恩恵なる言葉は嫌いである」。「然らばこれを何うしたらば善いか。唯一の途は功利一点張りで行くことである、我れの利益を根本として一切を思慮し、計画することである。我れの利益を根本とすれば、自然対手の利益も図らねばならぬことになる、対手の感情も尊重せねばならぬことになる」。「吾輩は敢えて我が国民に云う。我等は曖昧の道徳家であってはならぬ、徹底した功利主義者でなければならぬ、然る時に茲に初めて真の親善が外国とも生じ、我れの利益は其の中に図らるる」（「先ず功利主義者たれ」『全集』①、四〇五～七頁）、と。

戦争に勝ったのは、欲望統制の個人主義、いわば「公益の維持発展に就て共同の干渉管理を認めたる個人主義である」。「此の思想は、云う迄もなく内政に於ては、少数政治の滅亡にして多数政治の勃興である。経済政策に於ては、

無制限自由主義の非認にして公益主義の確立である。外政に於ては帝国主義の衰退にして国際連盟主義の進展である」(「大戦の齎せる思想の変化」『全集』②、一三四頁)。

小国主義の経済思想（1920年代）

「凡そ生産と云い、蓄積と云い、悉く人力の結果である。此故に、経済上の資源として、一番根本的にして大切なるは、人資なること申す迄もない」。「近代産業の奇蹟的な発達は、実に人智の進歩に伴うて、頻々として輩出する諸発明の賜物である。人力の結果である。於是乎、人の資源の改良に努め、其の事に成功する国民は栄え、人の資源の改良に怠り、其の点に失敗する国民は衰える。国運を左右する根本的の要素は人資の利用濫用の如何に存すと云い得られる。世人は動もすれば、我が国は領土狭小、又た富源も乏しい。(中略) 此種の富源ある他の領土を掠奪併合せぬ限り、如何ぞ、富強を世界に競うに足ろうやと説く。吾輩の見る所は然らず。我が国に鉄なく、綿なく、毛なく、穀物なきは少しも憂うるに及ばぬ。只だ最も憂うべきは、人資の良くないことだ」(『全集』②、二一二〜三頁)、と。

「私を以て見るに、我国は如何にも貧乏に相違ない。併し乍らそれは所謂天恵が足りぬからではなくして、人工が足りぬからである。何となれば富源は皮相に観察すれば自然物の如きも、実は人工を以て作るものであるからである」(『全集』⑤、三五九頁)。

戦時下の抵抗と自由主義（1931-45）

もし日本が連盟脱退、経済封鎖を受ける羽目になったら、「国家として浮沈の分るる重大事件であると同時に、経済界に取っても亦現在の其機構に大変革を将来する」「生死の事件」であり (「経済封鎖の実行難」『全集』⑨、一一頁)、世界から経済封鎖を受ける今後の戦争において、生産と消費に対する統制が避けられず、「日本の資本主義は、それで大体終焉に達するものと覚悟して善い」(「聯盟関係を悲観するな」『読売新聞』一九三三年二月二〇日)

「経済は、元来出来る限り広き地域に亙り、出来る限り多数の人間と交通交易を営むことに依って、発達を期待し得るものである」。「ところが、かの日満経済ブロック論は、我が日本を満州とだけ交通貿易を営む (中略) と云ふ状態に戻さうと主張するのである。それが如何に経済文化の逆転なるかは、多言を要せず明かだ」。対外貿易に占める日満貿易の僅少の額だけを見ても、「満州国とだけの提携で、今日の経済を維持する望みのないことは」明白である。「のみならず満州の地は、一時頻りに我が国に於て宣伝せられたように、それほど天然資源の非常に豊富な国ではない」。それを開発するため、多大な資本を必要とするばかりではなく、真に日本に利益をもたらすようになるまで「少くも二十年、三十年の後に待たねばならない」。その時まで満州は「我が経済の負担をなすに過ぎない」。同様な道理は、日満ブロック経済の延長線にある日満支経済ブロック論にも当てはまる。のみならず、「一歩支那本部に入って行くと」さらに複雑な問題にぶつかる。そこは「正真正銘昔から支那の領土であるのみならず、我が国との関係も亦満州に於けるよりも浅い。而して却って他の国——殊に英国——との縁故の方が遥かに深い」。よって、日本の取るべき態度は、「宜しく列国を誘引し、列国と提携して大に支那の開発に努むべきである。其の結果支那が経済的に繁栄すれば、我が国は自ら其の恵沢を受くるのである。支那に外国の勢力が入って来ることを敵視するが如きは、飛んでもない間違ひだ」、という (「日満支英の経済関係」『婦人之友』一九三五年一一月　六〇〜六四頁)。

「東亜新秩序声明」は、「概論すれば其の起草者は徒に美辞麗句の羅列に苦心し、肝心の内容を具象的に表現する用意を怠った」ものに過ぎず、互助連環の関係は「敢て日満支三国の間に限るべき問題ではない。苟も今日の世界に於て貿易、交通等の関係を持つ国と国との間には、必然政治経済文化等に就いて亦何等かの互助連環の関係は成立っていなければならない。我が国は無論満支両国と互助連環の関係がなければならぬが、同時に亦英国とも米国とも仏国とも乃至其の他の総ての国とも互助連環の関係なしに、此の世界に共に住むことは出来ない筈である」(「政府は重ね

て対支政策を具体的に声明すべし」『全集』⑪、八五頁）

「私は、満州で率直に話して来たのでありますが、満州の産業は、我が国や、又満州で、一般に考えているように、決してそんなに有利ではありません。将来は確かに大いに有望だと考えますが、差詰めとしては、相当不利な点があることを、十分に認識して掛らないと、飛んだ間違を生ずるだろうと思うのであります」（四八四頁）。「満州で事業を起そうとする者は、余程覚悟を定めて掛らなければなりません。満州に行けば、簡単に一儲けが出来るなどと考えたら大間違いです」（『満鮮産業の印象』『全集』⑫、四八八頁）。

自然資源の欠乏の日本は「今更之に苦情を云い立てたりとて詮方は無い」。日本人は唯だ日本という「舞台」に立ち、「最善の努力を尽して、其舞台を活用する外ない」（「大に生産を興し消費を増進すべし」（『全集』⑦、一五一頁）

「私は決して盲目的に今日の所謂資本主義制度を肯定する者ではありません」。しかしだからといって、何も日本がわざわざ「資本主義社会を一挙に滅ぼして」、露国の社会主義改造、あるいはイタリア、ナチスドイツの「真似をしなければならぬことはない」。「不平不満は人生の華で」、社会を進歩・向上に導く動力となるが、しかし、「功を急ぎ」ひたすら破壊に走ったら、逆に相反する結果をもたらす。今の改革者たちは少なくともまず、「自分が其の破壊後、支配せられる立場に立ったら何うか」と反省する必要がある。ふだん「自由主義を嘲笑する」改革者も、いったん支配される立場になると、やはり自由が欲しいに決まっているからである、と（『全集』⑨、三七三～五頁）

人間は「多元の欲望」を持っているが、それを実現するためには「一元」的に「調和統一」する必要がある。つまり人間の生活は多元の欲望と一元の統制の作用によって構成される一つの全体であり、社会生活も同様、「多」の側面の個人と、「一」の側面の社会とによって構成される。「多」も「一」も事物の生存発展のために現す「二つの作用に過ぎ」ないので、たとえ一時争うことがあっても、「絶対に相容れないと云う事のある筈はありません」。社会の進歩は、つまりこの二者の「作用」と「協働」によって推進される。（『全集』⑨、二七四～二七九頁）。

「私が、西洋の個人主義或は自由主義等と呼ばれる思想の影響を多分に受けて育ったものである」。「親炙し得た優れた幾人かの師のたまもの」により、「私は幸にも、其等の思想を正しき意味に於て理解する術を早くから知った」。
「社会と個人、さらに広き辞を用いれば全体と部分、此等は決して別々の存在ではなくして、一つの物の二つの面、若しくは二つの作用である。全体は勿論部分から成るものとして認識されるが、部分は亦全体が無くしては認識し得ない存在である。此等の二つは、相対立しながら、互に補完して、全一の実在を成すのである」。
「個人主義が尊重する個人は、即ち此の全体と対立する個人（部分）である。同様に全体主義が力説する全体は、部分（個人）と対立する全体である」。個人主義は「個人の側面の大なる活動を必要とし、可能とする時代」に現れるもので、全体主義は「全体の側面に多くの力の発動を期待する時代」に現れる。「従って此の二つの思想は、全体と部分とが対立する概念であるが如くに対立するが、同時に亦全体と部分とは互に補完して、全一の実在を成すが如くに補完して人生に役立つのである」（『全集』⑫、六〇一～二頁）。

戦後の自由主義

（近衛文麿について）支那事変の処理に「爾後国民政府を対手にせずとの有名な声明を発し、所謂東亜新秩序の建設を揚言して、又軍を深く支那奥地に進めることを許し、遂に日支の国交を匡救すべからざる紛乱に陥れた」。また「狂気の沙汰」と称すべき三国同盟を敢えて締結し、さらに非開戦論者といいながら皇室側近の地位を利用して戦争を阻止しようとせず、東条英機に内閣を引き渡した責任も大きい。「閣下が若し国民の信頼を回復せんとせば、…支那事変以来経歴せる一切の事実を公表し、軍国主義者の罪を明らかにすると共に、併て閣下の罪を天下に謝」し、如何なる経緯があったにせよ、速やかに改憲の任命を拝辞すべきだ」（「近衛公に与う」『全集』⑬、五七～八頁）。

（靖国神社について）「大東亜戦争は万代に拭う能わざる汚辱の戦争として、国家を殆ど亡国の危機に導き、…遺憾ながら其等の戦争に身命を捧げた人々に対しても、之れを祭って最早『靖国』とは称し難きに至った」。もしこの神社が存続する場合「後代の我が国民は如何なる感想を抱いて、其の前に立つであろう。ただ屈辱と怨恨との記念として永く陰惨の跡を留むるのではないか」（「靖国神社廃止の議」『全集』⑬、五五～六頁）。

「デモクラシーの真髄は国民各自が皆等しく政治の責任を負うにある。権利と共に義務を顧みるにある。個を主張すると共に全体を尊重するにある。これらに反するものはデモクラシーではない」と（『全集』⑬、七二頁）。

（日本国憲法草案、第九条次について）、「之れは真に重大の事である。従来の日本、否、日本ばかりでなく、苟も独立国たる如何なる国も未だ曽つて夢想したこともなき大胆至極の決定だ。…記者は此の一条を読んで、痛快極りなく感じた」（『全集』⑬、八七、八八頁）。

「自由党とか進歩党は何か漠然たるもので、今迄の資本主義をその儘やって、幾らか社会政策でもやって行こうという程度で甚だ曖昧模糊たるだけに思想の自由がある。そんならば私などが入って、その政党の政策政綱に自分の思想を取入れさせることの出来る余地がある。…その中のどっちかを選択するということになると、多少自由党の方が政党として纏まりがある」（『全集』⑬、一七八頁）。

「私は今日の世界は、企業者も労働者も、資本主義も社会主義ももはや相対立する時代を過ぎ、一層高次の『合』の段階にあるべきだと考える」（「今こそ一層高次の合の世界へ」『全集』⑭、三〇一頁）。

「今や世界は重ねて未曽有の変革をきたさんとしておる」。「私は率直に認めるが、資本主義と社会主義共産主義には両者にそれぞれ長所があり、また欠点がある。武力をもって一方が他方のイデオロギーを強制しないならば、両者の欠点は排除せられ、おのずから互いに長所をもって相補うに至り、ここに第三の生活原理は生まれるだろう」（「明日の経済学――資本主義と共産主義の融合」『経済学季報』『全集』⑭、五四〇～四一頁）。

姜　克實（岡山大学大学院教授）

1953年　中国天津市うまれ。
1966年　小卒の年で毛沢東の文化大革命に遭遇。その後十年間、下放、入営、工場労働者など波乱の人生を歩む。文革後、独学で大学受験に挑み1978年　25歳で南開大学入学。
1982年　国費留学選抜試験合格　復旦大学大学院入学
1983年　復旦大学大学院中退　来日
1991年　早稲田大学文学研究科博士後期課程（日本近代史専攻）修了（文学博士）
　　博士論文『石橋湛山研究』
1991-93年　早稲田大学第一文学部助手
1993年から　岡山大学教養部、文学部助教授をへて現在に至る。

著　書

『石橋湛山の思想史的研究』早稲田大学出版部、1992
『石橋湛山――自由主義の背骨』丸善ライブラリー、1994
『現代中国を見る眼――民衆から見た社会主義』丸善ライブラリー、1997
『石橋湛山の戦後――引き継がれゆく小日本主義』東洋経済新報社、2003
『浮田和民の思想史的研究――倫理的帝国主義の形成』不二出版、2003
『晩年の石橋湛山と平和主義――脱冷戦と護憲、軍備全廃の理想を目指して』明石書店、2006

〔 自由思想の継承・時代への警鐘 〕

湛山思想の真価

姜　　克　實
（岡山大学大学院教授）

１．いくつかの断面像

姜克實と申します。ジャン・クーシーとは、中国語の発音です。文学研究科の出身で、いま岡山大学で日本近代史を教えています。今日は、本学が生んだ思想家、石橋湛山の思想の価値についてお話します。

今年は日中国交正常化35周年の記念の年に当たりますが、石橋さんはその翌年になくなられたので、ご逝去されてまもなく、35年になります。この人物に関して、同時代の人なら、幾ばくの記憶があり、また残された功績や豊富な学識により、学界、財界、政治界、ジャーナリズムにもその存在が知られています。しかし、若い世代には、今までそれほど影響がなかったようです。

最近、少しずつではありますが、湛山の影響力が一般国民にも及んできています。教科書、受験のキーワードに東洋経済新報、石橋湛山などが登場し、今年の七月、NHKの人気番組「その時歴史が動いた」にも取りあげられ、広く一般視聴者の眼にも触れるようになっています。

しかし、石橋湛山は一体どんな人物なのか。その思想・歴史的価値について、まだ、ほとんど分かっていないようです。NHKの番組も例外なく、大量のビジュアルの資料を駆使したにも拘わらず、結局「その時、こんな偉い人物がいたぞ」、という上辺の印象しか、国民に伝えられませんでした。言い換えれば、今ようやく浮かんできた石橋湛山のイメージは、全体の思想像ではなく、戦前で帝国主義を批判したジャーナリストや、戦後、日中国交の回復に尽力した政治家など、その功績を並べた断片的な人物像にすぎません。

それもそのはず。じつは湛山の思想像を全体的に、有機的に把握するのは非常に難しいことでもあります。生涯88年、明治、大正、昭和の三つの激動の時代を生き抜いた彼には、ジャーナリスト・評論家の顔、経済スペシャリストの知識、総理大臣にまで登り詰めた政治家の経験のほか、あまり知られていない哲学思想家の一面もあり、どちらも半端の知識・修養ではありません。それらを立体的に把握することは、専門の研究者にとっても決して簡単なことではありません。

結局、今まで造られた石橋湛山の像は、それぞれの専門分野にある研究者たちが、それぞれの関心、アプローチによって提供した、いくつかの断面像に過ぎません。

すこし例を挙げて説明すると、

・一つの断面は、政界のサイドからみた石橋湛山像です。政治が混迷・腐敗したとき、良心ある政治家たちはよく湛山を取りあげ、政治の鑑にします。この時湛山の価値は、いうまでもなく、政治のモラルにあります。

いわば、石橋は、今日よく見られる、選挙基盤を「世襲の家業」にするような「政治屋」ではなく、非

金権政治、非世襲政治の清廉な政治家の手本である。

あるいは、権力闘争に明け暮れる今の政治家と違い、自らの政治理念に忠実する、信念ある政治家として、湛山を讃えます。湛山は党派の利益より、自らの理想、政策を優先にし、自民党に属しながらつねに超党派の姿勢で、党外の政策協力を求めたことで、よく知られます。とくに晩年の護憲、軍備全廃の姿勢は、保守よりむしろ革新勢力の立場に近い。

あるいは、読書の政治家、スペシャリストの首相として石橋湛山の知識を評価します。湛山は、原書で経済学を独学し、60年間の言論生活を通じて、2,000にも及ぶ論文、論評を書きあげ、その一部を記録した『石橋湛山全集』だけで、15巻に上ります。こうした湛山の学問的素質が評価されています。

このような、政治のモラル、学識、政策中心主義、超党派の姿勢などは、すなわち、政治家、政治評論家達が見た石橋湛山の価値であります。

・二つ目の断面は、ジャーナリズムから見た湛山像です。

石橋湛山は社会に入ってから政治家になるまで、約40年の間、主にジャーナリストとして活躍していました。明治末、大正初期の明治神宮造営反対論、普通選挙・代議政治論、また、一次大戦期の小日本主義、植民地放棄論、あるいは、戦時下の軍部への抵抗、戦後の靖国神社廃止論など、どちらにも反権力の、自由主義の精神が貫かれており、その時代の最高の到達点に位置づけられます。この反骨精神、自由主義、平和主義の立場は、ジャーナリズムから高く評価されており、いま、我が早稲田大学が打ち出そうとした湛山像も、おおよそこの認識であります。

また、やや主旨が違うけれども、石橋湛山の帝国主義批判論、小国主義の主張、英米協調の立場など、その異彩を放つ国際認識が、国際関係・政治外交の学問分野でも高く評価され、そのため、石橋を「外交評論家」と見ているものも多い。今日一般化した石橋のイメージも、おおよそこのようにジャーナリズムと外交評論の面を中心に構成されていると言えます。

・三つ目の断面は、経済界、とくに経済史学界からきた石橋評価です。

石橋湛山は実践的経済人であり、評論家としての活動も主として経済評論でした。老舗『東洋経済新報』の主幹、社長を長く務めており、その代表的主張の「小日本主義」も、正しく言うと、外交評論ではなく経済思想でした。経済的発想から産まれ、解決しようとした問題も、小国日本の経済発展の方向でした。

この経済思想の面こそ、湛山思想の真髄と言わなければならないが、複雑な経済理論、用語が絡まってきて、一般の人がなかなか理解できません。ですから、経済人としての石橋湛山評価は極めて重要ですが、なかなか広まらないのが現状であります。

以上のような、三つないし四つのサイドから見た石橋湛山像は何れも真実ですが、分断された「断面像」に過ぎません。一つの断面をもって、石橋を評価しようとしたら、場合によって間違った解釈を来す結果になります。

例えば、帝国主義に反対、普通選挙を主張、天皇制を批判などの言論から、大正期の石橋を「急進的自由主義」者とみる見解が産まれます。これは、先述したジャーナリズムのサイドからきた、代表的見解でもあります。しかし、「急進的」という狭い政治の視野にとらわれると、戦時中、沈黙することなく発言しつづけ、戦後、さらに保守政党の政治家になった石橋湛山の行動について、解釈することが出来ません。挙げ句に、いわゆる大正期の急進的自由主義、戦時中の変節者、戦後の保守化という説が生まれてきます。このように、方法論的行き詰まりによって、おのずから石橋の生涯に、戦前、戦時中、戦後の三つの断層を作ってしまいます。

あるいは、石橋湛山を国際関係論者、外交評論家とみる場合、その小国主義認識の経済論的背景、また

思想、哲学的根拠を解明できません。結局、到達点のみを評価する、いわば、うわべの言論の羅列になります。指摘すべきは、湛山思想の価値は決して帝国主義批判だけにではない。帝国主義を批判した外交評論家はほかにもいます。湛山の特徴はむしろ、経済の面で、帝国主義を捨てた後の日本はどのように生きるか、という理論にあります。

要するに、過去形の石橋湛山、あるいは飾り物の石橋湛山ではなく、いまの国家、社会、現在人生に役立つ湛山思想の歴史的価値を把握しようとしたら、ジャーナリズム、政治家、また経済評論家としての石橋の各断面像を総合的に、または有機的に把握する作業が必要だと思います。

この作業は一見難しそうですが、実はそれほどではありません。すなわち、湛山の思想哲学、自由主義と個人主義の特徴を軸に、各時期、また各分野における石橋湛山の言論・行動を総合的に把握することです。小日本主義の外交評論と、人間中心の生産力発展論、ケインズ主義的積極財政論とどんな関係なのか、大正期、「急進的」に見える主張と戦後の「保守政治家」とどんな内在的、思想的つながりがあるかを、湛山の自由主義の特徴を通じて捉えることであります。

２．石橋湛山の思想哲学と自由主義の特徴

湛山の自由主義思想には、二つの特徴があります。一は、自省（自己反省）、自律（自己規制）の主張であり、石橋湛山の言葉でいうと「欲望統制」の哲学であります。二は、社会生活の実践の効果を重視する価値観であります（プラグマティズム）。言い換えれば、人間の社会生活を円滑に進めるため、「自我」（「社会」という基本単位における個人）、また「国家」（「世界」という基本単位における一国）の欲望を、自律的に、また他律的に制御する主張です。石橋湛山は自由主義者、個人主義者であることは間違いありません。一方、彼が社会実践に入ったのは、自由放任の弊害がもろに現れた明治末年であり、この時彼が選んだのは、自由放任の古典的自由主義、個人主義ではなく、その弊害を是正しようとする新しい自由主義でした。湛山は自らの自由主義と個人主義を表現する時、かならず「新」自由主義、「正しき」個人主義の修飾を加えますが、この修飾には、自己規制の意味が含まれています。

ここから、石橋は決して、言われるような「急進的自由主義」者ではないことが分かります。むしろ、漸進的、自制的、実践的自由主義、個人主義と言うべきです。この自由主義、個人主義に対する理解・解釈から、彼の特色となる、個人と社会全体の利害調和、国家と国際社会全体との利害調和の主張が産まれてきたわけです。

もちろん、個人主義者である湛山は「個人本位」の立場を否定しません。しかし、彼が言う個人本位の意味は、行動の出発点（動機）と到達点（目的）のみで、つまりおのれの欲望から出発し、おのれの満足を目的とするが、その実現の過程において、社会との調和を主張するのが特徴です。

宗教的、献身的「利他」主義、奉仕精神ではなく、自己実現のために「自己規制」を唱えるバランス感覚のいい個人主義であります。最近、「共生」ということばが流行っており、自分の民族、国家だけではなく、他の民族・国家、他の文化、自然環境と一緒に調和して生きる意味で使用されているが、石橋湛山が主張していた欲望統制の概念に極めて近い。共生のことばが流行しはじめたのは、つい十数年前のことですが、もし、世の中が湛山のように、100年前の帝国主義の世の中からこの言葉の重みを知っていたとしたら、どれほどの戦争と破壊の犠牲が免れるか、想像する限りではありません。

この社会生活の実践効果を重視する、自制的自由主義、個人主義の立場にたって、湛山は自分の社会実践を出発させていきます。

明治の末年で、彼は文藝と社会評論の面において、社会の生活機能の健全化を目指し、欲望の統制、個

人と社会の調和を主張していました。やがて大正時代に入り、彼は政治評論の分野にも進出し、1915年頃、「新自由主義」という政治、経済綱領を掲げ出し、自由放任の是正、社会政策の施行、公平な分配などを唱えていました。国家による政策的規制によって、資本主義の弊害を是正しようとするのは、発想の主眼であります。

一次大戦の頃から、湛山は帝国主義批判論、植民地放棄論などを盛んに主張し、大戦後の太平洋軍縮会議に向けて、「大日本主義の幻想」の放棄、植民地などを「一切棄つるの覚悟」を、政府に要請しました。これらの「小日本主義」の発言も、同じように、国際社会の運営機能を健全化するため、各国家の領土的欲望を統制しなければならないという発想から来たものでした。

後、経済評論家になった湛山は、資源、領土に恵まれない小国日本の活路を見出すべく、人間中心の産業革命論を主張し、人間の潜在的能力の発揮による経済の発展の方向を示しました。1920年代以降、彼は新農業政策論、ケインズ主義的貨幣政策、新平価金解禁論、積極財政論などをつぎつぎ主張しだしましたが、これらの一見複雑そうにみえる経済論策も、じつは主旨が極めて明瞭です。すなわち、外に向く帝国主義、大国主義の欲望を制御して内面に向かわせ、いかに人間の頭脳、労働を最大限に利用するかにありました。湛山の経済学は要するに、人間の経済学であり、人間の努力、労働、国内の市場を重視する経済学でした。この人間の労働、智恵を唯一の資源とする小国主義的経済思想は、戦前の植民地放棄論、帝国主義批判論の中に活かされただけではなく、戦時中の世界経済論、また戦後の復興、再建の諸政策にも貫かれています。

晩年の湛山の「日中米ソ平和同盟」の平和構想にも同じように、国際社会の生活において、特定の国、特定のイデオロギーを固持するのではなく、価値観の異なる他の社会制度、他国との調和を図ろうとするもので、謙虚と反省的姿勢が貫かれていました。冷戦の解消を実現するため、彼は「人間の幸福」や「平和」など人類共通の価値観を携えて日中、日ソ間を行脚し、いつも、「幸福・平和」を求める同じ人間同士だから話せば分かるという、相手の立場、意見を尊重する謙虚な姿勢を保っていました。

以上のように我々は、石橋湛山の欲望統制の哲学と、社会生活の効果を重視する価値観という二つの思想特徴を通じて、戦前、戦時中、戦後の湛山、また言論人、経済人、政治家として異なったように見える湛山の断面像をトータルに、立体的に捉えることが出来るのではないかと思います。

３．石橋湛山の思想源流

では、以上のような石橋湛山の思想哲学がどのように形成したのか。

石橋湛山の思想形成に関して、幼少年期に受けた日蓮の影響と、山梨尋常中学校で間接に受け入れたクラーク博士の感化および、早稲田大学在学時代の田中王堂の哲学の影響という、三つの源流があるとされますが、日蓮とクラーク博士の感化は、主として湛山の人格形成に影響を及ぼし、志、忍耐力、反骨精神、チャレンジ精神など、湛山思想の下地を形成しています。

これに対して、湛山思想の方法論的特徴をなした、社会の見方、ものの考え方に影響を及ぼしたのは、主として田中王堂の哲学です。前述した湛山の言論活動に貫いた自省、自律の哲学、社会生活を重視するプラグマティズム的立場も、この田中王堂哲学からの賜物であります。

石橋湛山は、1907年早稲田大学哲学科を首席で卒業し、さらに特待研究生として一年間在学していました。恩師田中王堂との関係は、在学の四年間だけではなく、王堂が死去した1932年まで続き、さらに戦後になっても、王堂の著作集の刊行に尽力していました。湛山は後年、王堂先生の学恩を回顧して言う。

「私は、先生によって、初めて人生を見る目を開かれた。…もし、今日の私の物の考え方に、なにがしか

の特徴があるとすれば、主としてそれは王堂哲学の賜物であるといって過言ではない」(『湛山回想』岩波文庫、七八頁)。

この田中王堂はいったいどんな人物か、見てみましょう。彼は明治、大正期の哲学者、文明批評家としても名高い。また日本プラグマティズムの第一人者とも言われ、1889年からアメリカに８年間留学し、シカゴ大学で哲学部学部長のジョン・デューイに師事し、プラグマティズムの影響を受けて帰国しました。当時、「プラグマティズム」という学問の概念さえ産まれていない草創の時期で、デューイを始め、のちアメリカプラグマティズムを担ったリーダーたちは、ここで「シカゴ心理学派」を固め、哲学者、心理学者のウィリアム・ジェームズを師として仰いでいました。王堂はデューイとともに、ウィリアム・ジェームズの機能心理学から養分を受け、自らの哲学 —— 活動的一元論 —— を創出しています。

田中王堂の哲学には、人間の社会生活を重視する価値標準（プラグマティズム）と、凡ての事物を一元的、作用的に捉える相対主義的方法論という二つの面があり、社会生活機能の健全化の考慮から、「欲望」と「理想」、「個人」と「社会」の二側面の円滑な協調を主張するのが、最大の特徴であります。

人間の社会生活を円滑に進めるため、個人の欲望を統制しなければならないと、王堂は常に言いますが、この教えはすでに宗教的自省心、忍耐力の思想素地を持つ、若き石橋湛山に大きな感銘を及ぼし、田中王堂の、人間の社会生活を重視するプラグマティズムの価値基準と、事物を一元的、作用的に捉える相対主義的方法論も、そのまま石橋湛山の思想、方法論になり変わった訳です。

湛山の特徴は、王堂哲学に対する学問領域での貢献と発展ではなく、その社会実践にあります。1908年から社会に投身した湛山は、のち長い人生において、王堂の哲学を社会評論、政治綱領、国際認識、経済論に活かして、自らの独特の主張を打ち出すのに成功し、先に触れた欲望の統制と、社会生活の効果を重視する湛山流の新自由主義も、帝国主義批判論も、人間中心の小国主義の経済思想も、こうした王堂哲学の実践を通じて産まれた成果というべきです。

４．湛山思想の価値

湛山の価値はいったい何処にあるか。私のところに、湛山思想の未発の可能性を惜しむ声がよく寄せられます。もし、石橋湛山と東洋経済新報の小国主義が日本の世論をリードできれば…、もし、戦後の石橋湛山内閣を長く続けることが出来れば…、歴史が変わっただろう、と。

これに対して、私は否定的であります。戦前の帝国主義、軍国主義の世中において、小国主義が埋没されるのは必然の運命であり、戦後の石橋内閣がもし長く続いたとしても、劇的な政治変化は望めません。歴史的環境が未熟だったためです。

湛山思想の真価は、現実性、政策性にではなく、この時代を超えた先見性と、また、国家の在り方、また人間の生き方を示した思想性にあります。「反骨」や「進取」など、一代で終わる人格的要素だけではなく、「謙虚に生きる、禁欲的に生きる、周りと調和して生きる」という、人間または国家の生き方を示した思想方法的要素こそ、石橋湛山の思想の真価ではないでしょうか。だから、「政治家」、「ジャーナリスト」の呼称より、私は、石橋湛山のことを「思想家」と称して、一番ふさわしいのではないかと思います。話はこれで終わります。ご静聴、有り難うございました。

湛山思想の真価

石橋湛山（1884-1973）は明治、大正、昭和の三つの時代を生き抜き、言論界、経済界、政界で多様な活動をしてきた。その言論思想も哲学、文芸理論、社会批評、政治、外交理論、経済思想など多岐にわたり、奥行きも深い。一方、これまで湛山像には、政治家としての湛山、言論人としての湛山、また経済人としての湛山など、いろいろあるが、いずれも、その言論行動の一面をとらえた、断面像にすぎない。湛山の文芸批評、代議政治論、帝国主義批判、小日本主義、ケインズ主義的経済政策には相互に繋がりがあるか、戦前の「急進的」に見える言論と戦後の「保守党」政治家の行動に接点はあるのかと、未解決の問題が多い。その全体像を解明するため、彼の思想哲学、自由主義と個人主義を軸に、各時期、また各分野における言論行動を総合的に有機的に把握する必要があろう。

湛山は早稲田大学の哲学科の出身で、1907年首席で卒業し、さらに特待研究生として一年間哲学を研鑽していた。この間、文学部講師・哲学者田中王堂（1867-1932）の深い影響を受け、特殊な個人主義と自由主義の立場を固め、社会実践のための価値基準と方法論を形成する。その特徴は、一、自省（自己反省）、自律（自己規制）の主張と、二、社会生活の機能を重視するプラグマティズムの価値観にある。湛山の、文明批評に現れる「欲望統制」の主張、自由放任主義の是正を訴える「新自由主義」の立場、国際秩序を重視する小国主義思想、人間中心、労働力重視の国内生産力発展論、および戦時下の世界経済論、「正しき個人主義」の堅持、戦後の東西冷戦解消のための努力など、みな、こうした自省、自律の思想と、社会生活の機能を重視するプラグマティズムにその接点を見つけられる。

湛山の思想形成には日蓮、W.クラーク博士の感化による人格形成の部分と、田中王堂の学問影響による哲学、方法論の部分があるが、後者は、その思想の特徴といえる。

田中王堂は日本プラグマティズムの第一人者で、1889年からアメリカに８年間留学し、シカゴ大学でジョン・デューイに師事、また、W・ジェームズからの影響も受ける。のち、ジェームズとデューイらを中心にプラグマティズムの学説を形成するが、王堂も、草創期この学説の成立に貢献した一人といえる。彼の代表的主張は、「活動的一元論」というが、事物を一元的、作用的に捉える方法と、社会生活の機能を重視し、「欲望」と「理想」、「個人」と「社会」の円滑な協調を主張する二つの特徴が見られる。湛山はこの王堂哲学の精華をそのまま吸収して後の社会実践、評論活動に生かしたのである。

湛山の自省、自律の哲学と社会生活重視の価値観が、戦前には帝国主義否定の小国主義、戦後には冷戦解消ための「日中米ソ平和同盟」論という二つの、超時代の構想を生ませただけではなく、今日の「共生」思想の原型もその中に垣間見られる。

歴史的環境の未熟で、湛山の思想はその時代において無視され、埋没されていたが、近代史全体のスパンから眺めると、極めて早い段階から、正しい国家の在り方、政治のあり方、また人間の生き方を示した、思想史的価値が大きい。現実主義の政治家、言論人、経済人としてより、私は、石橋湛山を時代を見透した「思想家」として評価したい。

言論出発時の個人主義・自由主義認識（明治末年）

「十八世紀以来の西洋の天賦人権論の影響で、人には本来そんな権利が自らそなわっているように錯覚しているが、それはまちがいで、いわゆる人権が尊重されるのは、これを尊重することが社会生活上必要であり、価値があるからに外ならない。その必要がなく、価値がないところには、いかなるものも尊重はされない。」（『湛山回想』、一二〇頁）

「団体とは個人の集合である。個人無しには団体は出来ない。従ってある団体を善くしようとせば、是非共其の団体を形ち作っておる各個人を善くしなければならぬ」。「又之れに反して個人は団体無しには生活することが出来ない」、「されば個人の幸福発展ということを主眼とする個人主義者も、亦矢張其の当然の結果として団体主義を無視するわけには行かぬ。否、無視する処か是非共之れを取らねばならぬ」という（「軍隊の教育法」、一九一三年、『全集』①、五三六～七頁）。

「充実したる生活とは、諸種の欲望の統制せられて紊れざる生活をいう」。「個人が生存を維持せんが為めには、或個々の欲望はこれを棄てざるべからず。社会が生存を維持せんと欲せば、また実に或個人はこれを棄てて顧みざるの止むべからざるものあり」（『全集』①、一六一頁）。

「今日の婦人問題は最早『権利』の主張ではなくして、如何にして、我等（婦人）はこの生存競争の渦中に於て生活すべきかという問題になって来た」（「婦人位置の移動」『全集』①、二八五頁）。

新自由主義の政治思想（大正初期）

「国家は個人の欲望満足の機関として起ったものである。しかし個人の欲望は、その起り来たるだけを悉く発動せしむるということは出来ない。若し悉くを発動せしめたならば、却って全体としての欲望の満足を妨げる。故に何うしても或る統一を要し、或る整理を要する」。「日々夜々国家が個人の欲望の発現を制限しておると同時に、個人の欲望も絶えず国家を変化せしめつつあるのである」（「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」『全集』①、一二八頁）。

「国民をして飽まで議会を尊重せしめ、かの直接行動の如き好ましからぬ風を我国に移入せざらんと欲すれば、先ず普通選挙を施行するが第一の策である」、「吾輩は敢て普通選挙を国民の権利として主張せず、国家の安寧幸福の為に求むる」（「臨時議会と普選案」『全集』③、六一～三頁）。

「人間の生活は、徹頭徹尾、社会と自己との複合物である。否もっと厳格に云えば、社会でも、自己でもない、或全的単一の生活である。社会とか自己とか云うは、人間が其全的単一の生活を、便宜上二個の側面に区分して考えた、思惟の産物に外ならない」「動揺せる時代の哲学」（『全集』④、五八四頁）。

「吾輩は所謂人道なる言葉は嫌いである、恩恵なる言葉は嫌いである」。「然らばこれを何うしたらば善いか。唯一の途は功利一点張りで行くことである、我れの利益を根本として一切を思慮し、計画することである。我れの利益を根本とすれば、自然対手の利益も図らねばならぬことになる、対手の感情も尊重せねばならぬことになる」。「吾輩は敢えて我が国民に云う。我等は曖昧の道徳家であってはならぬ、徹底した功利主義者でなければならぬ、然る時に茲に初めて真の親善が外国とも生じ、我れの利益は其の中に図らるる」（「先ず功利主義者たれ」『全集』①、四〇五～七頁）、と。

戦争に勝ったのは、欲望統制の個人主義、いわば「公益の維持発展に就て共同の干渉管理を認めたる個人主義である」。「此の思想は、云う迄もなく内政に於ては、少数政治の滅亡にして多数政治の勃興である。経済政策に於ては、

無制限自由主義の非認にして公益主義の確立である。外政に於ては帝国主義の衰退にして国際連盟主義の進展である」(「大戦の齎せる思想の変化」『全集』②、一三四頁)。

小国主義の経済思想（1920年代）

「凡そ生産と云い、蓄積と云い、悉く人力の結果である。此故に、経済上の資源として、一番根本的にして大切なるは、人資なること申す迄もない」。「近代産業の奇蹟的な発達は、実に人智の進歩に伴うて、頻々として輩出する諸発明の賜物である。人力の結果である。於是乎、人の資源の改良に努め、其の事に成功する国民は栄え、人の資源の改良に怠り、其の点に失敗する国民は衰える。国運を左右する根本的の要素は人資の利用濫用の如何に存すと云い得られる。世人は動もすれば、我が国は領土狭小、又た富源も乏しい。(中略) 此種の富源ある他の領土を掠奪併合せぬ限り、如何ぞ、富強を世界に競うに足ろうやと説く。吾輩の見る所は然らず。我が国に鉄なく、綿なく、毛なく、穀物なきは少しも憂うるに及ばぬ。只だ最も憂うべきは、人資の良くないことだ」(『全集』②、二一二〜三頁)、と。

「私を以て見るに、我国は如何にも貧乏に相違ない。併し乍らそれは所謂天恵が足りぬからではなくして、人工が足りぬからである。何となれば富源は皮相に観察すれば自然物の如きも、実は人工を以て作るものであるからである」(『全集』⑤、三五九頁)。

戦時下の抵抗と自由主義（1931-45）

もし日本が連盟脱退、経済封鎖を受ける羽目になったら、「国家として浮沈の分るる重大事件であると同時に、経済界に取っても亦現在の其機構に大変革を将来する」「生死の事件」であり (「経済封鎖の実行難」『全集』⑨、一一頁)、世界から経済封鎖を受ける今後の戦争において、生産と消費に対する統制が避けられず、「日本の資本主義は、それで大体終焉に達するものと覚悟して善い」(「聯盟関係を悲観するな」『読売新聞』一九三三年二月二〇日)

「経済は、元来出来る限り広き地域に亙り、出来る限り多数の人間と交通交易を営むことに依って、発達を期待し得るものである」。「ところが、かの日満経済ブロック論は、我が日本を満州とだけ交通貿易を営む (中略) と云ふ状態に戻さうと主張するのである。それが如何に経済文化の逆転なるかは、多言を要せず明かだ」。対外貿易に占める日満貿易の僅少の額だけを見ても、「満州国とだけの提携で、今日の経済を維持する望みのないことは」明白である。「のみならず満州の地は、一時頻りに我が国に於て宣伝せられたように、それほど天然資源の非常に豊富な国ではない」。それを開発するため、多大な資本を必要とするばかりではなく、真に日本に利益をもたらすようになるまで「少くも二十年、三十年の後に待たねばならない」。その時まで満州は「我が経済の負担をなすに過ぎない」。同様な道理は、日満ブロック経済の延長線にある日満支経済ブロック論にも当てはまる。のみならず、「一歩支那本部に入って行くと」さらに複雑な問題にぶつかる。そこは「正真正銘昔から支那の領土であるのみならず、我が国との関係も亦満州に於けるよりも浅い。而して却って他の国——殊に英国——との縁故の方が遥かに深い」。よって、日本の取るべき態度は、「宜しく列国を誘引し、列国と提携して大に支那の開発に努むべきである。其の結果支那が経済的に繁栄すれば、我が国は自ら其の恵沢を受くるのである。支那に外国の勢力が入って来ることを敵視するが如きは、飛んでもない間違ひだ」、という (「日満支英の経済関係」『婦人之友』一九三五年一一月　六〇〜六四頁)。

「東亜新秩序声明」は、「概論すれば其の起草者は徒に美辞麗句の羅列に苦心し、肝心の内容を具象的に表現する用意を怠った」ものに過ぎず、互助連環の関係は「敢て日満支三国の間に限るべき問題ではない。苟も今日の世界に於て貿易、交通等の関係を持つ国と国との間には、必然政治経済文化等に就いて亦何等かの互助連環の関係は成立っていなければならない。我が国は無論満支両国と互助連環の関係がなければならぬが、同時に亦英国とも米国とも仏国とも乃至其の他の総ての国とも互助連環の関係なしに、此の世界に共に住むことは出来ない筈である」(「政府は重ね

て対支政策を具体的に声明すべし」『全集』⑪、八五頁）

「私は、満州で率直に話して来たのでありますが、満州の産業は、我が国や、又満州で、一般に考えているように、決してそんなに有利ではありません。将来は確かに大いに有望だと考えますが、差詰めとしては、相当不利な点があることを、十分に認識して掛らないと、飛んだ間違を生ずるだろうと思うのであります」（四八四頁）。「満州で事業を起そうとする者は、余程覚悟を定めて掛らなければなりません。満州に行けば、簡単に一儲けが出来るなどと考えたら大間違いです」（『満鮮産業の印象』『全集』⑫、四八八頁）。

自然資源の欠乏の日本は「今更之に苦情を云い立てたりとて詮方は無い」。日本人は唯だ日本という「舞台」に立ち、「最善の努力を尽して、其舞台を活用する外ない」（「大に生産を興し消費を増進すべし」（『全集』⑦、一五一頁）

「私は決して盲目的に今日の所謂資本主義制度を肯定する者ではありません」。しかしだからといって、何も日本がわざわざ「資本主義社会を一挙に滅ぼして」、露国の社会主義改造、あるいはイタリア、ナチスドイツの「真似をしなければならぬことはない」。「不平不満は人生の華で」、社会を進歩・向上に導く動力となるが、しかし、「功を急ぎ」ひたすら破壊に走ったら、逆に相反する結果をもたらす。今の改革者たちは少なくともまず、「自分が其の破壊後、支配せられる立場に立ったら何うか」と反省する必要がある。ふだん「自由主義を嘲笑する」改革者も、いったん支配される立場になると、やはり自由が欲しいに決まっているからである、と（『全集』⑨、三七三～五頁）

人間は「多元の欲望」を持っているが、それを実現するためには「一元」的に「調和統一」する必要がある。つまり人間の生活は多元の欲望と一元の統制の作用によって構成される一つの全体であり、社会生活も同様、「多」の側面の個人と、「一」の側面の社会とによって構成される。「多」も「一」も事物の生存発展のために現す「二つの作用に過ぎ」ないので、たとえ一時争うことがあっても、「絶対に相容れないと云う事のある筈はありません」。社会の進歩は、つまりこの二者の「作用」と「協働」によって推進される。（『全集』⑨、二七四～二七九頁）。

「私が、西洋の個人主義或は自由主義等と呼ばれる思想の影響を多分に受けて育ったものである」。「親炙し得た優れた幾人かの師のたまもの」により、「私は幸にも、其等の思想を正しき意味に於て理解する術を早くから知った」。
「社会と個人、さらに広き辞を用いれば全体と部分、此等は決して別々の存在ではなくして、一つの物の二つの面、若しくは二つの作用である。全体は勿論部分から成るものとして認識されるが、部分は亦全体が無くしては認識し得ない存在である。此等の二つは、相対立しながら、互に補完して、全一の実在を成すのである」。
「個人主義が尊重する個人は、即ち此の全体と対立する個人（部分）である。同様に全体主義が力説する全体は、部分（個人）と対立する全体である」。個人主義は「個人の側面の大なる活動を必要とし、可能とする時代」に現れるもので、全体主義は「全体の側面に多くの力の発動を期待する時代」に現れる。「従って此の二つの思想は、全体と部分とが対立する概念であるが如くに対立するが、同時に亦全体と部分とは互に補完して、全一の実在を成すが如くに補完して人生に役立つのである」（『全集』⑫、六〇一～二頁）。

戦後の自由主義

（近衛文麿について）支那事変の処理に「爾後国民政府を対手にせずとの有名な声明を発し、所謂東亜新秩序の建設を揚言して、又軍を深く支那奥地に進めることを許し、遂に日支の国交を匡救すべからざる紛乱に陥れた」。また「狂気の沙汰」と称すべき三国同盟を敢えて締結し、さらに非開戦論者といいながら皇室側近の地位を利用して戦争を阻止しようとせず、東条英機に内閣を引き渡した責任も大きい。「閣下が若し国民の信頼を回復せんとせば、…支那事変以来経歴せる一切の事実を公表し、軍国主義者の罪を明らかにすると共に、併て閣下の罪を天下に謝」し、如何なる経緯があったにせよ、速やかに改憲の任命を拝辞すべきだ」（「近衛公に与う」『全集』⑬、五七～八頁）。

（靖国神社について）「大東亜戦争は万代に拭う能わざる汚辱の戦争として、国家を殆ど亡国の危機に導き、…遺憾ながら其等の戦争に身命を捧げた人々に対しても、之れを祭って最早『靖国』とは称し難きに至った」。もしこの神社が存続する場合「後代の我が国民は如何なる感想を抱いて、其の前に立つであろう。ただ屈辱と怨恨との記念として永く陰惨の跡を留むるのではないか」（「靖国神社廃止の議」『全集』⑬、五五～六頁）。

「デモクラシーの真髄は国民各自が皆等しく政治の責任を負うにある。権利と共に義務を顧みるにある。個を主張すると共に全体を尊重するにある。これらに反するものはデモクラシーではない」と（『全集』⑬、七二頁）。

（日本国憲法草案、第九条次について）、「之れは真に重大の事である。従来の日本、否、日本ばかりでなく、苟も独立国たる如何なる国も未だ曽つて夢想したこともなき大胆至極の決定だ。…記者は此の一条を読んで、痛快極りなく感じた」（『全集』⑬、八七、八八頁）。

「自由党とか進歩党は何か漠然たるもので、今迄の資本主義をその儘やって、幾らか社会政策でもやって行こうという程度で甚だ曖昧模糊たるだけに思想の自由がある。そんならば私などが入って、その政党の政策政綱に自分の思想を取入れさせることの出来る余地がある。…その中のどっちかを選択するということになると、多少自由党の方が政党として纏まりがある」（『全集』⑬、一七八頁）。

「私は今日の世界は、企業者も労働者も、資本主義も社会主義ももはや相対立する時代を過ぎ、一層高次の『合』の段階にあるべきだと考える」（「今こそ一層高次の合の世界へ」『全集』⑭、三〇一頁）。

「今や世界は重ねて未曽有の変革をきたさんとしておる」。「私は率直に認めるが、資本主義と社会主義共産主義には両者にそれぞれ長所があり、また欠点がある。武力をもって一方が他方のイデオロギーを強制しないならば、両者の欠点は排除せられ、おのずから互いに長所をもって相補うに至り、ここに第三の生活原理は生まれるだろう」（「明日の経済学――資本主義と共産主義の融合」『経済学季報』『全集』⑭、五四〇～四一頁）。

姜　克實（岡山大学大学院教授）

1953年　中国天津市うまれ。
1966年　小卒の年で毛沢東の文化大革命に遭遇。その後十年間、下放、入営、工場労働者など波乱の人生を歩む。文革後、独学で大学受験に挑み1978年　25歳で南開大学入学。
1982年　国費留学選抜試験合格　復旦大学大学院入学
1983年　復旦大学大学院中退　来日
1991年　早稲田大学文学研究科博士後期課程（日本近代史専攻）修了（文学博士）
　　博士論文『石橋湛山研究』
1991-93年　早稲田大学第一文学部助手
1993年から　岡山大学教養部、文学部助教授をへて現在に至る。

著　書

『石橋湛山の思想史的研究』早稲田大学出版部、1992
『石橋湛山――自由主義の背骨』丸善ライブラリー、1994
『現代中国を見る眼――民衆から見た社会主義』丸善ライブラリー、1997
『石橋湛山の戦後――引き継がれゆく小日本主義』東洋経済新報社、2003
『浮田和民の思想史的研究――倫理的帝国主義の形成』不二出版、2003
『晩年の石橋湛山と平和主義――脱冷戦と護憲、軍備全廃の理想を目指して』明石書店、2006